

ご注文の際、プライス・コードもご記入下さい。

プライス・コード{a ¥ 1 6 9 0 / A ¥ 1 8 9 0 / B ¥ 2 0 9 0 / C ¥ 2 2 5 0 / D ¥ 2 4 9 0}

(表示価格は税抜き) 別途消費税が加算されます

www.tambourine-japan.com email: song@tambourine-japan.com

注文方法サイト: <http://www.oct-net.ne.jp/tambouri/order.htm>

[CD/USA {female}] (P15) [CD/CANADA] (P19)

[DVD/USA] NTSC all regions

※国内製 DVD フォーマットで再生可能

- *BRUCE SPRINGSTEEN: Classic Performance A
(B. Springsteen の初期のベスト・ライヴ集。全 14 曲。1988 年/2005 年。American Legends)
- *WILLIE NELSON: Willie A
(91 年の "The Great Outlaw Valentine Concert" {全 14 曲} と "Nashville Superstar Concert" {全 12 曲}。88 分。2002 作。MVD)
- *TONY JOE WHITE: In Concert A
(92 年ドイツのライヴ・ハウスでの熱いライヴ。全 11 曲。約 60 分。ドイツ Inakustik)
- *EMMYLOU HARRIS: Live In Germany D
(2000 年の Spyboy をバックにしたドイツでのライヴ。全 13 曲。2011 作。Immortal)
- *JOHN HIATT: Live From Austin Tx A
(開封。1993 年のライヴ。w. Davey Faragher, Michael Urbano, Michael Ward。全 14 曲。2005 作。New West)
- *STEPHEN STILLS AND MANASAS: The Best Of Musikladen A
(72 年のテレビ・ショーのライヴ映像。40 分。Pioneer)
- *CROSBY, STILLS & NASH: Live In L. A. A
(1982 年ロサンゼルスでの New Universal Amphitheater でのライヴ。全 23 曲で 80 分。2007 作。オランダ Immortal)
- *BIG BROTHER AND THE HOLDING COMPANY: Hold Me A
(2007 作。Dig Music)
- *ANI DIFRANCO: Trust A
(2004 年 5 月 11 日&12 日の二日間行われた Washington DC のクラブでのライヴ。全 21 曲。2004 作。Righteous)
- *BOB DYLAN: Don't Look Back C
(開封。1965 年イギリス・ツアーのドキュメンタリー・フィルム。1 時間 35 分。67/99 作。Docurama)

[DVD/USA] PAL all regions

※PAL 専用 DVD フォーマットかパソコンで再生可能

- *WILLIE NELSON&LEON RUSSELL: In Concert a
(Paradise Show のライヴ。Leon [ヒール] と Willie [ギター&ヒール] のアコースティックなトリオとして Maria Muldaur&Bonnie Raitt そしてフルバンドの数曲は二人の持ち味がたっぷり楽しめるライヴ。55 分。2005 作。ドイツ All Stars)
- *JAMES TAYLOR: In Concert a
(副題 "You've Got A Friend"。バンド付き 18 曲入りライヴ。"Sweet Baby

Jamesから変わらぬ James の温厚な人柄がそのままかつ音楽性もシンプルなのからポップでファンキーなまでそのままの温かいライヴ。2004/2005 作。82 分。ドイツ All Stars)

[DVD/U S A] NTSC Region 1

※NTSC Region 1 専用 DVD プレイヤーかパソコンで再生可能

- *JIM GROCE: Have You Heard — Live A
("You Don't Mess Around With Jim", "Operator", "Bad, Bad Leroy Brown" 他全 15 曲入りライヴ。約 1 時間 10 分。2003 作。Shout)

[DVD-AUDIO/U S A]

※国内製 DVD プレイヤーで再生可能

- *JOHN SEBASTIAN: From The Front Row, Live ¥1000
(全 16 曲入り弾き語りライヴ。画像はライヴ映像ではなく、1 曲 1 曲静止映像。2003 作。Silverline)

[VIDEO/U S A] 日本の VHS 方式でご覧になれます

- *ALLMAN BROTHERS BAND: Live At Great Woods D
(Gregg Allman, Dickey Betts ほかによる Allman の 91 年のライヴ。11 曲。90 分。92 作。Sony)
- *STEVE EARLE & THE DUKES: Transcendental Blues Live D
(全 17 曲。70 分。2000 作。E-Squad)
- *TROUBADOURS OF FOLK MUSIC D
(93 年 UCLA でのライヴ。Arlo Guthrie, Richie Havens, Beausoleil, John Prine, Janis Ian, Jefferson Starship, Janis Ian, Odetta。54 分。94 作。Rhino)

[CD/U S A]

- *TOM RUSH: Voices (CD) B
(LP) ¥2890
(1941 年生まれの Tom Rush の新作。「新作制作はのんびりペースで」と決めていた T. Rush がようやくその重い腰を起こさせたのは、Jim Rooney と Jim の音楽仲間達。彼らの全面バックアップのもと制作された本作は、水槽から放されて生まれ育った池の中を自由に泳ぎ回る魚のように生き生き伸び伸びな Tom Rush 翁の唄のオンパレード。収録された新曲のすべてが、聴き親しんだ Tom Rush 節で、しかも超快調。全 12 曲中、二曲の伝統曲以外は Tom の新曲で、約半数は、ニューハンプシャーの極楽なカントリーサイドにある友人宅で作ったという。Jim Rooney と Jim の仲間達による音楽は、最高に快樂で、Tom の唄は終始にこやか。そしてリスナーもにこやか保証。2018 作。Applesed)
- *TOM RUSH: Celebrates 50 Years Of Music D
(CD+DVD セット。Tom Rush の音楽人生 50 周年記念のライヴ。録音は 2012 年 12 月 28 日。DVD を見た。ゲスト {David Bromberg, Jonathan Edwards, Buskin & Batteau, Dom Flemons} 全員集合のもと、Tom Rush の唄 "Hot Tonight" で幕開けした後、ゲストの唄が 7 曲。Tom の

出番はその後、8曲。ひょいっと70年代にタイムスリップ。映像で見るTomは現役バリバリの印象。ボーナスにはインタビュー、リハーサル風景そしてDavid Brombergの“Tongue”他4曲がライブで収録されている。CDはDVD収録曲16トラックから13トラックを収録。2013作。Appleseed)

- *WILL STEWART:County Seat A
(ソロ名義のアルバムだが、カントリー・ロック・スタイルの音楽。SSWでヴォーカルでギタリストのWill Stewartの本作は、彼の故郷アラバマに帰郷したときにアルバムのアイデアが浮かんだという。エレキギター、スティールギター、バンジョー、ドラムス、ベースそれに女性シンガーJanet Simpsonとのデュエットなど、美味すぎる輝き感のあるカントリー・ロックに惚れ惚れ。故郷を想い作ったことも作用してのことか、WillのヴォーカルはややDylanぽくもあるが、声になつっこそうな甘み感があって、後ろ髪引かれる魅力がある。そうした作用はサウンドにも表われていて、スティールギターをフィーチャーした大好きな「音」に夢見気分に襲われる。時折、熱く感情移入されたロックギターは、音楽の味わいを深めもする。最高！2018作。Cornelius Chapel)
- *JEFFREY MARTIN:Dogs In The Daylight (Expanded Edition) A
(三枚目“One Go Around”で初体験し、惚れ込んでしまったSSWのJeffrey Martinの2014年作のCDにボーナス・トラック4曲を加えて“Expanded Edition版”として新に発売された19曲収録CD。ドラムス、ベース、ピアノ他による伴奏だが、基本的にギターの弾き語りを中心にしたJeffreyの唄は、三枚目で惚れ込んだ唄そのままに洪くて味わい深く、言葉を噛みしめるようにうたうJeffreyの唄は最高潮。何と言うか、やはり70年代の米国SSW/フォークの、それもコアな匂いを発する雰囲気ある唄は彼独特な味わいがあった、聴き惚れてばかり。本作もBob Martinクラスの洪々でGreatなSSWアルバム。ゲスト:Anna Tivel。2014年/2018作。Fluff And Gravy)
- *JEFFREY MARTIN:One Go Around A
(三枚目。2017作。Fluff And Gravy)
- *CHRIS SMITHER:Call Me Lucky D
(この6年間の間に作った新曲を収録した新作で二枚組。Bill Conway{ドラムス}, David Goodrich{ピアノ、各種ギター}, Matt Lorenz{ヴァイオリン、ヴォーカル}の少数精鋭で固めて制作された本作は、本当に新曲集?!と思ってしまうほど、彼の初期の妖艶なムードを醸し出した唄が多く、おおおと聴き入ってしまった。その妖艶なムードは素朴に凝縮した音作りに加えて、齢を重ねた分、枯れた味わいにもなっていて、味わいが深い。自然体でうたうChrisの唄は、唄そのものに魂が感じられもする。2018作。Signature Sounds)
- *CHIP TAYLOR AKA JAMES WESLEY VOIGHT:Fix Your Words B
(ジャケット写真はChip Taylorが子どもの頃の家族写真。左端がChipで右端が母親のBarbara。Side A“Fix Your Words”、Side B“When I Was A Kid”と分けられた本作は、これまでのChip Taylorのどのアルバムより声が年老いた風で、祈りや哀しみや懐

かしむ気持ちが込められていて、唄が心にしみわたる。元々語りかけるように悠々と自作の唄をうたう Chip だが、彼の持ち味をさらに煎じ詰めた味わいを極めていて、感動の深さが深い。名盤中の名盤。2018 作。Train Wreck)

*JOHN GORKA: True In Time A
(廃業した Red House の最後の作品になった John Gorka の新作。この 10 年間してきたように古い校舎で参加メンバーが集まって、演奏してから録音したという。J. Gorka はまるで思い出の詰まった実家に帰って、たっぷりと落ち着いた気分で、数々の「思い出」を唄にしてうたっているかのような、唄にも音にも何か懐かしさや寂しさ感じられるものになっている。このようなしみじみ感はいくつかの John Gorka のアルバムでは味わえなかったのでは？本作は J. Gorka のプロデューサー John Jennings [2015 年没] に捧げられている。2018 作。Red House)

*MICHAEL JOHNSON: Moonlit Deja Vu A
(ミネソタのヴェテラン SSW の M. Johnson のラスト・アルバム。2012 作。Red House)

*JIM KWESKIN: Unjugged B
(Jim Kweskin 爺さん、よくぞまあ米国の古い雰囲気唄ばかりの、それもバンジョーやギターの弾き語りのアルバムを作ってくれました。唄のほとんどは 1900 年代前半の頃の白人黒人の垣根のない民謡。Jim 爺さんは、各民謡の様々な物語に心遊ばせ、一曲一曲を表情を変え、あるときは軽やかに、またあるときはスローに、にこやかにうたう。かと思えばしみじみとして、心に響く唄も。Jim はまるで古謡のレパートリー豊富な心優しい語り部爺さん歌手。Jim 爺さん流のメロディ・フォークの古びた感じがまた何とも言えず味わい深い。Jim 爺さんが客と一緒にうたうのが好きという Donovan の“Colours”で幕。宝物の Jim Kweskin's America と並ぶ宝物。w. Bonnie Dobson, Ben Paley, Tali Trow, Bill Denton。全 15 曲幸せ気分保証。2017 作。Hornbeam)

*MICHAEL McDONALD: Live on Soundstage ¥2690
(CD+DVD のセット。元 Doobie Brothers の Michael McDonald の 2017 年 5 月、シカゴの Soundstage's Grainger Studio でのライブ。ホーンや女性バックグラウンド・シンガー達も加わった大型ロック編成による本作は、Doobie で垣間見せていた彼のゴスペルやソウル・ミュージックの要素の強い音楽が、より強く打ち出されていて、その味わいの深さと彼のヴォーカルのパワフルさに驚かされる。音楽活動歴 45 年の蓄積の上に育まれた堂々たるソロ・ライブ・アルバムだ。Doobie のヒット曲“Sweet Freedom”{ぼくも観客も大きな拍手！}他全 13 曲。2017 作。BMG)

*ERIC ANDERSEN: Mingle With The Universe B
(副題“The Worlds Of Lord Byron”イギリスの詩人バイロン男爵 ジョージ・ゴードン・バイロン [1788 年-1824] の詩に Eric Andersen が曲をつけてうたったもの。75 歳の年齢に相応しい晩秋の趣のある声で昔と変わらないアンダースン節。全体的に優しく穏やかな唄が多く、ずっと彼の唄の世界へと引き込まれる。一曲

ワードをフィーチャーしたアラブ風のインスト曲もある。w. Inge Andersen [奥様], Michele Gazich, Giorgio Curcetti, Cheryl Prashker, Paul Zoontjens。2017 作。独 Meyer)

- *OLD SALT UNION: Old Salt Union A
(Old Salt Union は、2014 年の Freshgrass Band コンテストで優勝したという米国中西部を拠点に活動する五太郎のニューグラス～カントリーロック・バンド。印象はコンテストの名称の「フレッシュグラス」がぴったしの若々しさと初々しさと輝き感のある音楽。メンバーの内三名が SSW で、それぞれの持ち唄を土臭くって軽やかなサウンドと軽やかな唄とハーモニーで楽しませる。軽やかなカントリー・ロックのファンには絶好の唄と音楽というか、久々のホームラン・アルバム。不況地帯で生きる彼らは、だからこそ夢や愛を前向きに唄にしようたう。気分爽快作。2017 作。Compass)

- *JAMES LUTHER DICKINSON FEATURING NORTH MISSISSIPPI
ALLSTARS: I'm Just Dead, I'm Not Gone "Lazarus Edition" A
(2009 年に 67 歳で亡くなった James Luther Dickinson が、2006 年 6 月 2 日、息子二人 {Luther&Cody} が主要バンド・メンバーの南部ロック・バンドの North Mississippi Allstars を従えて行ったコンサート・ライブ音源からのスペシャル・エディション版。スワンプの名盤の誉れ高き彼のデビュー・アルバム "Dixie Fried" {1972 年} で出逢ってから、南部音楽一途だった James Luther と彼の音楽を受け継ぐ North Mississippi Allstars とによる、説明不必要な骨太で本醸造な南部ロック～スワンプ。2006 年/2017 作。Memphis International)

- *THE SHOW PONIES: How It All Goes Down A
(Show Ponies は Clayton Cheney {ヴォーカル、ベース} と Andi Carder {ヴォーカル、バズ} の男女のリード・ヴォーカルに Jason Harris {ヴォーカル、ギター}, Philip Glenn {フイドル}, Kevin Brown {ドラムス} を加えた一姫四太郎の、ロスを拠点に活動するルーツロック・バンド。彼らのロックは二人のヴォーカルを含めて、ルーツ色が濃く、また 70 年代のカントリー・ロックのように音楽に活気がみなぎっていて、雑草のようにたくましい。デジタルの時代に対抗するかのような彼らの健やかなルーツロックは、心身を元気にしてくれる。2017 作。Freeman)

- *JACK GRELLLE: Got Dressed Up To Be Let Down A
(聴くなり馴染んで、すぐに和んでしまった、まるで 70 年代の緩くて人なつっこい唄たち。ヴォーカルの感じは John Prine っぽい、Michael Hurley のような、とぼけた悠長さもあつたり、Jesse Colin Young と彼の仲間達が立ち上げたラクーン・レコーダー派の音楽のような 70 年代の西海岸田舎志向カントリー・ロック風の人びり感もあつたりで、個人的に全くの「好み」。演奏は無名のミュージシャンばかりのカントリー・ロック・バンド編成で、演奏の緩さも魅力。心も体もニコニコ保証。2016 作。Big Muddy)

- *STEVE EARLE: Live From Austin Tx A
(2000 年 11 月、Austin City Limits でのライブ。バックは Eric Ambell {ギター}, Kelly Looney {ベース}, Will Rigby {ドラムス}。全 15トラックの 74 分。

- 2008 作。New West)
- *STEINAR ALBRIGTSEN & TOM PACHECO:Big Storm Comin' C
(在庫一枚。1993 作。Rownd Tower Music)
 - *STEINAR ALBRIGTSEN & TOM PACHECO:Nobodies B
(在庫一枚。CD-R。2002 年。Norske Gram)
 - *MICHAEL STANLEY:The Ride(2013 作。Line Level) A
 - *TOM RUSSELL:Box Of Visions A
(在庫一枚。在庫期間が長いので開封検品してお送りします。1993 作。Stoney Plain)
 - *TONY JOE WHITE:Deep Cuts B
(南部男 Tony Joe の最深部から生まれた南部ロック。2008 作。Munich)
 - *DANIEL MARKHAM:Disintegrator a
(Terry Allen や Flatlanders タイプとの紹介を見て、興味を持ったテキサスの若き SSW の Daniel Markham の新作。期待した兩大物の土臭さや泥臭さは薄い、それよりも R. E. M. タイプの西海岸志向のビターズウィートなルーツロックを若者らしく、かつこよくガンガン聴かせていて、いやはや圧巻。Daniel 自身の唄も今が旬の夢の輝きを放っていて、一曲一曲がこだわりの重厚なルーツロック・サウンドと共に、聴き応えたっぷり。不思議と曲が印象的で、ふとしたときに頭の中で彼のうたが鳴っている。2016 作。簡易紙ジャケット)
 - *THE STATESBORO REVUE:Ramble On Privilege Creek B
(Statesboro Revue は Stewart Mann の南部ロッカーの貫禄たっぷりなヴォーカルをフィーチャーしたルーツロック・バンド。彼らのロックは、70 年代の南部志向、特に Capricorn 産のアメリカン・ロックの匂いが充満。無骨というか、荒削りというか、骨太なロックを体現していて、しかも Stewart の入魂のヴォーカルと相まって、聴き応え十分。すべてが 70 年代のバンドがひょっこり現代に姿を現わしたかのような「音」だ。2013 作。Blue Rose)
 - *MUSTARD'S RETREAT:5 Miles Or 50,000 Years A
(1970 年代から活動する二人組 {David Tamulevich & Michael Hough) の 1990 年のライブで発売は 1993 年作。本作は約半数が二人の心温まるオリジナル曲で、米国フォーク流のストーリーテリングな唄の世界を楽しませる。全 14 曲。1993 作。Mustard's Retreat / 発売年の古い CD ですので、検盤をしてお送りします)
 - *PROFESSOR LOUIE AND THE CROWMATIX:Wings On Fire a
(The Band のロック・スピリットを受け継ぐウッドストックのロック・バンドの本作は Rick Danko と Levon Helm に捧げられたもので、そのスピリットは一段と高潔。彼らのロックは Levon Helm のスタイルを基本にニューオリンズ色やロック色を濃くしたもので、そのエネルギーは熱い。ゲスト: John Platania, Michael Falzarano。2012 作。Woodstock)
 - *RICHARD DOBSON:Here In The Garden ¥1500
(Townes Van Zandt や Guy Clark と共にテキサスのフォーク・シーンを引っ張ってきた Richard Dobson の六枚目。本作は Richard が 1999 年にドイツをツアーした時に組んだバンドのリターンの Thomm Jutz をギターと共同ア

ディューサーで迎えて制作したアルバム。本作は、うたうこと、バンド仲間と音楽することを楽しむかのように、ゆったりとロッキン・カントリーしていて、快適。2013 作。Brambus)

- *MIKE LAUREANNO: Pushing Back Wintertime B
(Mike Laureanno は、今は亡き Jack Hardy のハイパートのヴォーカル・ハーモニーのシンガーとして、かれこれ 12 年間、Jack Hardy と活動を共にしてきた SSW。Jack に較べ、Mike の声はやや高めなのだが、押し殺したようなかすれた声まで似ているのだから。Mike は Jack から唄の心を学んだようだ。2013 作。Mike Laureanno)
- *KEITH SYKES: It's About Time (1993 作。Oh Boy) A
- *US RAILS: Heartbreak Superstar A
(Tom Gillam, Ben Arnold, Scott Bricklin, Matt Muir, Joseph Parsons の誰もがヴォーカルを担う今日のアメリカン・ロック・シーンで、最も愛すべきバンドのひとつ、US Rail の新作。70 年代の主に西海岸のロック・バンドが保持していたアメリカン・ロックの土臭さや泥臭さを濃縮したロックは、昔どこかで聴いたことがあるようなヴォーカルやサウンドで、体にすこぶる美味しい。バンドの連中皆が、昔のロックに夢を馳せて、夢を追っかけてロックしているような素敵なロックだ。2013 作。Blue Rose)
- *THE DIRTY GUV' NAHS
: Somewhere Beneath These Southern Skies A
(ナッシュビルのガッツあるルーツ・ロック・バンド。本作は 3 枚目。ナッシュビルと言えば、昔はカントリーのメッカだったが、彼らのロックは南部っぽくて結構気骨があって、真にクワなロックを体現する。リード・ヴォーカルの James Trimble の、アメリカン・ロック魂のあるソウルフルなヴォーカルは、骨太なバンド・サウンドと一体となって凄いインパクトがある。Levon Helm Band との共演、そして Levon Helm のスタジオでの録音経験もあるそうだ。ラストの“One Dance Left”では、Levon Helm っぽいヴォーカルを振り絞ってもいる。2013 作。Blue Rose)
- *I SEE HAWKS IN L. A: Mystery Drug A
(ヘンなグループ名。総勢 8 名編成のこのバンドは、1999 年に LA で結成されたという。バンド編成はアルバムを出すごとに変わっていて、以前のアルバムには Chris Hillman も一員だったことも。唄も音楽も、まるで昔の西海岸の自然派カントリー系ロッカー達のように大らか。音楽を楽しむ空気が伝わってくる。2013 作。Blue Rose)
- *ANDREW CALHOUN: Living Room a
(本作で聴く Andrew の唄は、唄に揺ぎがなく、大きな優しさのようなものが感じられて、Andrew の SSW としての成長というか、円熟味が感じられるもの。自室でアコースティック・ギターを爪弾き、リラクセスしてうたう Andrew の数々は、心穏やかにする。w. Casey Calhoun (Andrew の娘さん。素直な唄が気持ち良い)、Tracy Grammer, Jenna Rawling, etc. 2013 作。Waterbug)
- *AD VANDERVEEN: Driven By A Dream B
(Iain Matthews とのデュオ“Iain Ad Venture”の Ad Vanderveen の本作はところどころ Neil Young with Crazy Horse をもホツさせる思いっきりルーツ回帰&若かりし夢回帰の見事なアメリカン・ルーツ・ロック。至福保証。2012 作。Blue Rose)

- *MARK DVORAK:Time Ain't Got Nothin' On Me a
 (フォーク・ギター、ブルース・ギターのギター演奏にも定評のある M. Dvorak だが、曲調により様々な表情を見せる鮮やかなギターの伴奏に乗ってうたわれる彼の唄は体の芯から暖まる優しい眼差しの穏やかで優しい唄。ギターのメリハリがしっかりしているせいか、彼の穏やかな唄の穏やかさが引き立つ印象で、ふわふわと極楽な気分になる。ゲスト: Michael Smith。2011 作。Waterbug)
- *LONG GONE "Utah Remembers Bruce "Utah" Phillips a
 (70 年～80 年代、Utah Phillips 作の唄をうたう SSW が本当に多かった。本作は Utah の唄に影響を受けたという SSW の Kate MacLeod が Utah の息子の Duncan の協力を得て制作した Utahソング集。Philo が存在していたら、Philo が真っ先に企画しそうなアルバムだ。トラックの語りと一曲グループの唄以外の 16 曲は全て Utah の唄を愛する SSW によるギター等の弾き{奏き}語り。Kate MacLeod 以外は初耳の SSW ばかりなのだが、一曲一曲の「唄」が瑞々しく新鮮。2011 作。Waterbug)
- *MAD BUFFALO:Red and Blue a
 (カントリー・ロックは不滅を実感させるナッシュビルの SSW の Randy Riviere がヴォーカルの Mad Buffalo。カントリー・ロックのスタイルだが、一つ一つの唄は Randy の SSW としての持ち味が出ていて、むしろその各曲の個性がカントリー・ロック・スタイルの音作りをどこかカントリー・マンのロマンっぽい深みのあるものにしていて、Randy の唄の味わいも深まっている。w. Reggie Young, Chad Cromwel {Neil Young Band}, etc. Mad Buffalo)
- *RANDY BURNS:The Simple Things a
 (昔のままの瑞々しい 2008 年作。CD-R。自主制作盤)
- *CARTER BROTHERS:The Road To Roosky a
 (これは気合の入ったブルークラス系カントリー・ロック。カーター・ファミリーの家系の Tim&Danny 兄弟の本作はカントリー/ルーツ・ロックの深さが違う。骨太のカントリー・ロック。w. Sam Bush, Tim O'Brien, Ferrell Stowe。2011 作。Compass)
- *ERIC ANDERSEN:Blue Rain C
 (E. Andersen の本作は闇の中で直向きでブルーかつブルース色濃厚なルウェーでの 2006 年のライヴ。本作の彼は何かに取り憑かれたように凄い。2006 作。ルウェー-Blue Mood)
- *ERIC ANDERSEN:Ghosts Upon The Road A
 (88 作。カダ Alert Music)
- *BILLY C. FARLOW:You Better Run a
 (元 Commander Cody&His Lost Planet Airmen の Billy の本作は重厚な南部ロック。w. Mary-Ann Brandon, Fred James, Jeff Davis, Mark Horn。2011 作。ドイツSPV)
- *GREG BROWN:Freak Flag A
 (ブルース、カントリー、フォーク等アメリカン・ミュージックの要素混在で、G. Brown 印の煮込み味 SSWアルバムを創作し続けて彼だが、本作も同じ。この旨みある味わいは彼にしか出せない。w. Bo Ramsey, Mark Knopfler, Richard Bennett, David Mansfield, etc. 2011 作。Yep Roc)
- *GREG BROWN:Dream City B
 (副題"Essential Recordings Vol. 2, 1997 - 2006"。1997 - 2006 の間収録の Red House と Trailer の音源からの 16 曲と未発表音源から

の4曲の二枚組。2009作。Red House)

- *AZTEC TWO-STEP:Days Of Horses a
(初めて聴いた時、耳を疑った。Rex Fowler&Neal ShulmanのAztecの唄は彼らの72年のデビュー作と変わりなく、深緑の若葉のように清々しい。二人によるヴォーカル・ハーモニーの初々しさは彼らならではのもの。2004年のコピーライト。CD-R。Red Engine)
- *RICHIE FURAY:I Am Sure a
(Poco/Richie Furayファンだったら“The Heartbeat Of Love”と同じくらい歓喜の声を上げること必至のコピーライトが2005年の最高にご機嫌なRichieのソング。共演者はChris Hillman, Dan Dugmore, Jimmy Ibbotson, Bob Carpenter, Jeff Hanna, Michael Rhodes, etc. もうこれは出来すぎなくらいなRichieがリード・ヴォーカルのPoco風カントリー・ロック。全13曲。ItsAboutMusic.com)
- *JAMES McMURTRY:Childish Things a
(昨今のRay Wylie Hubbardがラスの泥臭く、ずっしり重みのあるアメリカン・ロック。ヴォーカルもサウンドも地鳴りがするほど鈍く唸りを立て凄みを放つ凄いロックだ。2005作。Lightning Rod)
- *STEVE EARLE:Washington Square Serenade B
(CDとDVDのセットの限定盤。DVDは国内プレイヤーで再生可。S. Earleの本作はまるでデヴィッド・リンの的雰囲気、初期Dylanやそれを通り越してパワースタッフの土臭さに到達したりもする文字通りアメリカン・ミュージックの根っ子回帰志向アルバム。DVDはニューヨークのスタジオライブ3曲他で37分24秒。2007作。New West)
- *PONDEROSA:Moonlight Revival A
(南部アトラクタから颯爽とデビューした4人組ロックバンドのPonderosaは南部魂を持った、若い、今どき珍しく骨のあるアメリカン・ロック・バンドだ。南部系アメリカン・ロック・バンドのヴォーカルとしては理想的なKalen Nash [男性]のソウルフルなヴォーカルに粘っこいエレキギターと重厚なロックはもう抜群。2011作。New West)
- *KIP BOARDMAN:The Long Weight a
(音楽的にはHarry Nilssonに近いだろうか。唄が自由に散歩でもするかのようにな軽やかで、豊かなイメージが広がる。ヴォーカルはSteve Forbertっぽい。Gia Ciambotti, Claire Holley, Kristin Mooneyの女性バックシンガー・ヴォーカルを含め、バックバンドのサウンドがオール・アメリカン・ミュージックのスケールで巧み、かつ自在で見事。2010作。Ridiculous)
- *STORYHILL:Shade Of The Tree a
(自主制作で12枚のアルバムを発表し、2007年にRed Houseから“Storyhill”を発売し、多くのSSWファンを虜にしたChris Cunningham & John Hermansonのヴォーカル・デュオ“Storyhill”の本作は、SSWの唄心というか良心が詰まった湧き水のごとき清き逸品。2010作。Red House)
- *JIM POST:Reach Out Together A
(白髪の爺さんになったJimの声は軽やかで若々しい。Jimの飄々とした唄とMoby GrapeのJerry Millerの歯切れの良いギター、そしてRandy SabienのフィドルとAndy Steilのスライド・ギターやバンジョーはぴったり噛み合っていて、抜ける青空のような屈託のないJimの唄は最

- 高に輝いている。2009 作。Jim Post)
- *GEORGE ENSLE:Build A Bridge A
 (Townes Van Zandt が「George Ensle は最も影響力のある尊敬すべき SSW の一人」と賞賛するテキサスのヴェテランSSW の George の唄はどことなく Jerry Jeff Walker の風合いなのだが、精神が自由というか飄々としていて、唄に爽やかさが感じられる。Bill Staines 的な風合いも。SSWファンのお聴盤になること請け合い。2008 作。Berkalin)
- *MARK STUART:Songs From A Corner Stage(99 作。Gearle) A
 *BUTCH HANCOCK:War And Peace A
 (初期 Dylan を想起させる彼本来の粗い肌触りの引きずるような唄は流石。抜群の最近作。w. Joe Ely, Jimmie Dale Gilmore, Rob Gjarsoe。2006 作。Two Roads)
- *ERIC TAYLOR:The Kerrville Tapes a
 (Kerrville Folk Fes でのライブからの全 10 曲。全曲ギターの弾き語りだが、鮮やかなアコースティック・ギターの伴奏とまるでスタジオ録音のような唄うことに集中した Eric ならではの情景描写が見事な心痺れる叙情的な唄の数々。絶品。2003 作。Silverwolf)
- *THE NORMAN FISHINTACKLE CHOIR
 :One Kind Of Bait In The Bucket A
 (72 年作“Out The Window”と 73 年作“Shimmy She Roll, Shimmy She Shake”の Jim Pulte がヴォーカルのバンド。昨今のスワンプ系アルバムでは最もスワンプ色が濃い。ファン感動保証。2007 作。Windstorm)
- *DANNY FLOWERS:Tools For The Soul A
 (本作はカントリー調、初期 Ry Cooder 調、南部ロック調そしてゴスペル調 [結構 Leon Russell っぽい] 等、どれも唄も音楽の魂に触れるもので、一曲一曲アメリカン・ルーツ色が濃厚で土臭くかつ泥臭い。w. Emmylou Harris, John Cowan, Steve Mackay, etc. 2007 作。Brash Music)
- *JIMMY HALL:Rendezvous With The Blues A
 (Johnny Sandlin のプロデュースでアラバマ録音の Wet Willie の J. Hall の本作はティーン・サクスな本仕込みブルース。David Hood, Clayton Ivey, Johnny Sandlin, Jack Pearson, Bill Stewart 等による伴奏はブルース色濃厚な南部ロック。3ボーナス・トラック付で計 14トラック。2006 作。Rockin' Camel)
- *TOM MAY:Blue Roads, Red Wine a
 (かれこれ 35 年以上のキャリアのヴェテランSSW の T. May の本作はうたう心優しい旅人そのままに旅先の思い出の唄や友愛の唄や夢や希望の唄などがそっと優しくうたわれている。Tom のヴォーカルはそっと包み込むように優しい。ヒドゥン・トラックが 1 曲隠されている。ほほえみの一曲。2008 作。Waterbug)
- *DAVID MALLETT:Midnight On The Water a
 (2005 年夏のライブ。“Pennsylvania Sunrise”時代を思い起こさせる唄声に感激。2006 作。North Road)
- *A. J. ROACH:Revelation ¥1500
 (ヴァージニアの山奥育ちで伝統音楽を聴き、若い頃古いアカペラの聖歌をうたっていたという A. J. だが、彼の唄の芯の部分でカントリーやブルース等白人と黒人のルーツの音楽がミックスされた音楽性を保持し、伝統的聖

歌やゴスペルの祈りから発した柔軟で逞しい意志のようなものが感じられる。Great!2007 作。Waterbug)

*TINSLEY ELLIS: Moment Of Truth A
(南部ブルース・ロックの大御所登場。いやはや鳥肌立つブルース・ロックが次から次。エレキギターをかき鳴らし、大地揺らすブルース・ロックを叩き出す。全てが骨太で肉感的。w. Kevin McKendree, The Devil One, Jeff Burch, Mike Lowry, Michelle Malone。2007 作。Alligator)

*ALASTAIR MOOCK: Fortune Street a
(通好みのスルメ味 SSW アルバム。主に鮮やかなギターの伴奏でダミ声でうたう Alastair のざらっとした感触の唄は静かなインパクトがある。Chris Smither の“Train Home”のプロデューサーの David Goodrich のプロデュースは Alasdair の個性を際立たせていて見事。Chris Smither ファン是非。2007 作。オランダ CoraZong)

*RAMSAY MIDWOOD
: Popular Delusions&The Madness Of Cows a
(J. J. Cale 風いぶし銀南部ロック。Produced by Don Heffington [トランスも]。w. Greg Leisz, Randy Weeks, Jake Labotz, David Jackson, etc. 2006 作。Farmwire)

*DAN HICKS&THE HOT LICKS: Featuring An All-star Cast Of Friends ¥2780
(CD と DVD のセット。CD、DVD とも Dan Hicks の 60 歳誕生日お祝いコンサートのライブ。D. Hicks と縁のあるミュージシャンやシンガー総出演の素晴らしいライブ。DVD は PAL でコンサートの前のフィルムから笑わせる。至福保証。CD は全 13 曲で DVD は 2 曲多い 15 曲。2003 作。Surfdog)

*MICHAEL DE JONG: The Great Illusion C
(フランス人 SSW {だが音楽は米国 SSW 系} の Michael {唄は英語} の本作は全曲ギターの弾き語り。一見 Bob Dylan の初期のようなシンプルな唄なのだが、心からの魂震わす唄は素晴らしい。SSW ファン必聴。2006 作。MW)

*MICHAEL DE JONG: Last Chance Romance C
(人のロマンス等がとろけるように深く静かな空気の中で噛み締めるようにゆったりと唄われる。彼独特な独り言そして夢想の世界。2002 作。オランダ Munich)

*TONY ARATA: Such Is Life A
(CD-R。Tony はじっくり練り上げられた極上の唄を響きのいいアコースティック・ギターをお伴にゆったり噛み締めるように唄う。シンプルながら唄が深い。理想的 SSW アルバム。w. Dan Dugmore, Pat Alger, Lee Roy Parnell, etc. 2005 作。Little Tybee)

*TONY ARATA: Way Back When A
(Tony の唄は嬉しくなるほど心優しく心が澄んだ唄、そして音も清々しくてスイートなカントリー・ロック調。丁寧な音作りを含め、一曲一曲に彼の温厚さと誠実さがきっちり込められていて、心のこもった手作りな作品として全てが温かい。70 年代の良質の SSW アルバムと同じ感触。2000 作。Little Tybee)

*DAVID MASSENGILL: The Return ¥1050
(倉庫の隅で発見。95 作。Plump)

- *RICHARD MEYER:The Good Life! ¥1050
(倉庫の隅で発見。92作。Shanachie)
- *TOM OVANS:Tale From The Underground(Great!95作。NSR) A
- *ROD MacDONALD:A Tale Of Two Americas A
(子の親になったRodの「唄いたいこと山ほどあり」の思いがガング
伝わってくるフォーク・ソングの原点回帰の見事なアメリカン・フォーク。2005作。
Wild River)
- *MARK ERELLI:Hillbilly Piggrim A
(M. Erelliの本作は古きカントリー・ミュージック回帰。Markのカントリーは懐古趣
味を超えて、今の新しいアメリカの音楽としての勢いがある。音楽スタイルは古い
が音楽新鮮野菜。ゲスト:Erin McKeown。2005作。Signature)
- *JEFF WILKINSON:Landscapes C
(見聞きした不思議な光景や事件等をざっらとした感触の土臭いサ
ウンドでどっぷり自分のペースで唄う。一曲一曲の自作の唄がタイトル通
りJeffの見聞きし、感じた「風景」のように唄として収まっている。
全てがJeffの時間の流れなのがいい。Brambus)
- *BART DAVENPORT:Maroon Cocoon a
(子供の頃、ヒッピーだった両親のレコード・コレクションを聴き漁ったという彼
だが、音楽性は70年代の夢想的フレイッシュ・フォークあるいはソフト・ロック的
感触で輝くギターを爪弾き、夢見心地な唄をゆったり描くように唄
う。2005作。Antenna Farm)
- *DAVID BALL:Freewheeler A
(タイトル曲はJesse Winchesterのナンバーだが、このカントリー系SSWのD. Ball
の本作はヴォーカルといいサウンドといいカントリー度が深い。ヴォーカルもサ
ウンドも泥臭くエッジアップ。w. Mike Johnson, Kenny Malone, Milton Sledge
, Dan Frisell, etc. 2004作。Acan)
- *FRED KOLLER:No Song Left To Sell A
(どっしりとしたSSWアルバム傑作。Shel Silversteinとの共作集で
全14曲。2001作。Gadfly)
- *ERIC TAYLOR:The Kerrville Tapes A
(Kerrville Folk Festivalのライヴ。2003作。Silverwolf)
- *J. T. VAN ZANDT:WRECKS BELL B
(ジャズ・ヴァン・ザントの息子J. T.が8曲とWrecks Bellが9曲の全17
曲入りライヴ。2004作。Romeo)
- *THE WOODYS:Teardrops&Diamonds A
(Byrds〜Every Brothers〜Gram Parsons的全アメリカン・ミュージック・ファン
の琴線に触れる懐古&郷愁ムードとロックする快樂さと恋する思い等が
チャラルに表出したほんわか気持ちのいいカントリー・ロック。w. Al Perkins,
Dave Pomeroy, Gam King, Tammy Rogers, Steve Conn, Billy Block,
etc. 2001作。Dynamike)
- *CELEBRATION! "Highlights From The 40th Philadelphia
Folk Festival" A
(2001年8月24〜26日に開かれたフェスのライヴ。全13曲。出演者は収録
順にArlo Guthrie, Laura Love Band, Sonia, Solas, David
Bromberg, Janis Ian, Richie Havens[All Along The Watchtower],

Tom Paxton&Anne Hills, Chris Smither, Jimmy Johnson, Laurie Lewis, Tom Rush[Driving Wheel!], Judy Collins.2002 作。Sliced Bread)

- *RECKLESS JOHNNY WALES:It's Not About The Money A
(ユーイ7、皮肉、悲哀等など人生のひきこもごもをペーソス漂う唄でうたう凄く个性的で魅力的な SSW。Randy Newman に似てるが、Recklessの方が音楽的に開放感があって豊か。w. Jeff"Skunk"Baxter, Clive Gregson, Dave Pomeroy, Brian Willoughby, Cathryn Craig, Pat McInerney, Michael Snow, etc. 2003 作。Villa Villa Music)
- *SAYLOR WHITE:Graven Image B
(風貌は Willie Nelson 風。ヴォーカルは Jerry Jeff 風。どことなく時代遅れなおっとりした唄と土臭いサウンドはほのぼのとさせ、またしみじみといい気分させる。ひと言ひと言思い出に浸り、2003 作。Last Call)
- *BILLY JOE SHAVER:Freedom Child A
(オールタイム・ファイリングな Billy Joe の本作は自身のルーツ回帰の懐古趣味的な一方で、古いカントリーやブルース調の節での Billy のヴォーカルは古臭くも輝いている。2003 作。Compadre)
- *DAVE SCHRAMM:Hammer And Nail ¥1980
(内省的 SSWアルバム傑作。99 作。トイ Blue Rose)
- *SHAWN SAHM:Shawn Sahn A
(Doug Sahn の息子 Shawn の Doug Sahn そっくり?なソニマリの本作。すっかりサー・ダグラス・クインテット風なテキサス・メクスとハスキーで甘い Shawn のヴォーカルは理想のテキサス音楽を体現。ゲスト: Doug Sahn, Augie Meyers, Flaco Jimenez. 2002 作。イヴリ Evangeline)
- *PONTY BONE:Fantasize A
(テキサスのドクター・ジョンとでも言うか、縦揺れ、横揺れたつぶりリズム。Ponty のおおらかな太いヴォーカルもいい、いい。ようこそ!ミラクルな Ponty Bone のテキサス・メクス・ショーの世界へ。2002 作。Loudhouse)
- *DON WILLIAMS:Silver Turns To Gold A
(いわば心の名曲集。SSWファン向けのいい唄ばかり。終始心和む。w. Sam Bush, Kenny Malone, Tim Williams, Charles Cochran, etc. 2002 作。RMG)
- *DON MICHAEL SAMPSON:Old Wood Bridge A
(2 枚組 CD-R。あの"Americansongs"の Don の悠々自適の自主制作盤。各種愛用ギターのアタックの強い巧みなギターを伴奏にした Don の唄は彼のキャリアがしっかりと熟成されたしたたかでしなやかなもの。2001 作。Red Rose)
- *JEFF TARLTON:Astral Years a
(米国人 SSW だが資質は英国人 SSW 的。90 年代初めに故郷を離れ、録音時はベルリンでストリート・ミュージシャン。マンコリックで宇宙的音楽は Nick Drake や Tim Buckley を思い出させる。全 20 曲の長い旅。97 作。Delerium)
- *JEFF TARLTON:Dragin Spring a
(前作の延長線上の 2 枚目。少し型にはまった分音楽的。やはり夢の異次元の世界へ。ベルリンでの録音。2000 作。Delerium)
- *TONY JOE WHITE:One Hot July A

- (スワップな煮込み味。T. J. White ここに在り!2000作。Hip-0)
- *ALAN GERBER: The Boogie Man (1999作。Mugwamp) a
 - *CALVIN RUSSELL: Crossroad B
(ギター弾き語りライブ。ごっつい唄が全16曲。“想い”が乗り移った粗いギターと“想い”がこぼれんばかりの入魂の唄に釘づけ。2000作。Last Call)
 - *CALVIN RUSSELL: Sam B
(テキサスのヴァンランSSWの8枚目。プロデューサーが James Luther Dickinson で、バックには Roger Hawkins, David Hood, Brenda Patterson の面々。ロングセラー。99作。Last Call)
 - *TOM ROZNOWSKI: Voice Beyond The Hill A
(T. Roznowski の温厚な人柄が滲み出た心優しいSSWアルバム。70年代っぽい味と心あるカントリー・ロックが Tom の持ち味を最高に高めている。w. Jon Randall, Rob Ickles, James Talley, Brent Truit, Richard McLaurin, etc. おなじ感涙保証。2001作。Blazing Stump)
 - *HUNTER MOORE: Conversations B
(ナッシュヴィルのSSW。H. Moore の本作は Chris Donohue {ヘース}, Phil Madeira {エレクトリックギター}, Steve Hindalong {ハーカッション} の小編成ながらソリッドかつタイトなルーツ・ロック。Hunter の乾いた粗野なヴォーカルか何とも言えず魅力。2001作。Brambus)
 - *HUNTER MOORE: Delta Moon B
(その昔のベストセラー。やや南部寄りかつ繊細さも持ち合わせた本作は今聴いても新鮮。SSW名盤。w. Kenny Malone, Bob Wray, Russ Pahl, etc. 96作。Brambus)
 - *JERRY JEFF WALKER: Mr. Bojungles C
(2曲のボーナス・トラック付の計12曲入。68/93作。Rhino)
 - *TAJ MAHAL&THE HULA BLUES BAND: Hanapepe Dream B
(西アフリカのお次はハワイ!? Taj の渋いヴォーカルもバンドの音楽もユルユルで心地よいロール感があって、ご機嫌。Taj の各種ギターはもちろんのことウクレレやスティールギターも最高の響き。夢心地保証。2001作。ドット&M)
 - *MAIN STAGE LIVE “Falcon Ridge Folk Festival” A
(Kennedys, Dar Williams, Greg Brown, Richard Shindell, Nields, Patty Larkin, Peter Mulvey, Vance Gilbert and more。全14曲。99作。Signature)
 - *TOM MITCHELL: When The Moon Is Right ¥1000
(時折、Bob Carpenter をホフツさせる世界をも垣間見せる。SSWファン静かなる衝撃作。96作。Truesongs)
 - *ELLIOTT MURPHY・IAIN MATTHEWS: La Terre Commune A
(異色のデュオ。それぞれのソロの持ち味とデュエットがバランスよく収められた友情盤。2001作。ドット&M Blue Rose)
 - *CHRIS SMITHER: Live As I’ ll Ever Be B
(何も言うことなし、C. Smither の持ち味そのままが発揮されたギター弾き語りライブ。録音は96-99年。全16曲。Hightone)
 - *DAVID MUNYON: Acrylic Teepees B
(いつも夢想的で透明な D. Munyon の唄の世界。w. Al Perkins, Dave Pomeroy, Craig Krampf。珠玉の逸品。96作。Glitterhouse)

- *DAVID MUNYON: Slim Possibility B
 (ある種神聖とも形容できる D. Munyon 独特な唄の世界だ。非の打ち所のない潔癖さだ。理想の SSW アルバム。96 作。Stockfish))
- *JEB LOY NICHOLS: Just What Time It Is a
 (ベアーズガイル録音の傑作“Lovers Knot”に次ぐ待望の New。しばし南部&トピカル・ファイリングのある本作に夢心地…。知性と感性と職人ワザと三拍子揃った傑作。2000 作。Rough Trade)
- *JERRY JEFF WALKER: Night After Night D
- *BUTCH HANCOCK・JIMMIE DALE GILMORE: Two Roads a
- *MARK STUART: Songs From A Corner Stage (1999 作。Gearle) a

[LP/USA {female}]

- *VIVIAN LEVA: Time Is Everything ¥2890
 (父親はマルチ楽器奏者で母親は Hazel Dickens & Alice Gerrard と共演経験のあるアパラチアン・シンガーというアパラチアの若き女性 SSW の Vivian Leva のデビュー作。Vivian 嬢の本作は、アパラチアン・トラッドを志向した音楽ではない。Kate Wolf や初期の Emmylou Harris の、さらにルーツの古いカントリーの匂いのする自然体の、すこぶる心地よい SSW アルバム。Vivian はそんな古くさいアメリカン・サウンドと音楽スタイルの音楽に身を預け、声を裏返らせて、時に快活に、時に優しく語りかけるようにうたう。Vivian の声も音楽パートナーの Riley Calcagno のバンジョー & ハーモニーほかフィドルやスティール・ギターなどの音色もアパラチアの森に優しく吹く風のように清々しく心地よく、体に美味しい。2018 作。Free Dirt)

[CD/USA {female}]

- *RITA COOLIDGE: Safe In The Arms Of Time (CD) A
 (LP) ¥3390
 (1945 年生まれの Rita Coolidge の信じられないほどぶっ飛びの新作だ。何よりと言ったら Rita に失礼だが、David Grisson, Bob Glaub, Brian MacLeod, John Thomas のバンド+女性バックグラウンド・ヴォーカルを含むゲスト・ミュージシャンが創り出す西海岸～南部ロックな「音」が涙が出るほど抜群。とりわけカナダから呼び寄せたという Joey Landreth のぶっといスライドギターはぐぐぐとくる。そんな美味すぎる豊穣な米国ロックを浴びてうたう Rita の大河の流れのように堂々としたヴォーカルが凄い。また音楽がしっかりしてるから、よりヴォーカルが生える。二曲目に収録された“Doing Fine Without You”は Graham Nash が Russ Kunkel と作った曲だが、この曲を Graham Nash が Rita に送ったことが、13 年振りに Rita が本新作を作るのを後押ししたという。この曲メチャ最高！本作は Priscilla Coolidge と Michael Hogarth の霊に捧げられている。2018 作。Blue Elan)

※CD か LP かをお知らせ下さい。

- *JANIVA MAGNESS: Love Is An Army A
 (ブルース～南部ロック女王 Janiva Magness の意地でも「南部ロ

ック」な徹頭徹尾南部ロック志向の堂々たる新作だ。プロデューサーは Janiva の名盤“Love Wins Again” [2016 年グラミー賞“Best Blues Album”賞受賞] を手がけた Dave Darling。Janiva のめっちゃソウルフルなヴォーカルとホーンと女性バックিং・ヴォーカル隊を配したバンドによるずっしりと南部臭く、豊穡感ある南部ロック・サウンドにワクワク。全てが横綱級。ゲスト:Delbert McClinton{Janiva とデュエット!}, Rusty Young, Charlie Musselwhite 他。2018 作。Blue Elan)

- *MARY CHAPIN CARPENTER: Sometimes Just The Sky B
(Mary Chapin の新作。本作も彼女の一種独特な、それは黄昏時の時間が止まったようなマジカルな美意識で貫かれていて、静かに釘付けになる。カントリー・タッチだが、繊細極まりない穏やかで極楽なサウンドと Mary の自然な抑揚のあるストーリーテリングな唄は、ちょっと他の SSW の音楽では味わえない格別な味わい。トラック・ファンには Mary Black の唄で知られる“The Moon And St. Christopher”を作者の Mary Chapin が本作で再演していて、Mary のよりさらに感動が深い。自作曲全 13 曲全てがマジカル。2018 作。Lambert Light)
- *LAURA CANTRELL: Kitty Wells Dresses B
(Laura の 4 枚目に当たる本作は、Laura が子供の頃からのファンというカントリー・ソングの Kitty Wells のカバー集。スティール・ギターを含めたカントリー・サウンドの全てがハワイ音楽のような清涼感があって、清々しい。2011 作。Shoeshine)
- *BETSE ELLISE: High Moon Order A
(The Wilders のヴォーカル、フィドルの Betse のヨ。13 曲中 7 曲が自作曲で 3 曲が伝統曲。彼女のフィドル演奏はザーク・スタイルのオールド・タイム・フィドルだ。そうで、僕の耳には John Hartford の女性版のように聞こえる。今の世の中にこんな音楽あり?! と思ってしまうほど、ホームメイドな古臭くて、飄々とした唄と音楽だ。2013 作。Tree Dirt)
- *ALICE GERRARD: Bittersweet A
(かれこれ 40 年以上にわたって、アメリカン・ルーツ音楽の第一線で活動してきた Alice の 10 年ぶりの本作は、全曲自作曲の深い味わいのある素晴らしい SSW/フォーク・アルバム。体の中から湧き上がるようなリラックスした唄は、いぶし銀のアメリカン・ルーツ・サウンドを伴って、ある時は心に沁み、またある時は心を和らげ、またある時は心をほがらかにさせる。いぶし銀のアメリカン・ルーツ音楽の名品だ。w. Laurie Lewis, Stuart Duncan, Bob Ickes, Bryan Sutton, Todd Phillips, Tom Rozum, etc. 2013 作。Sprouce And Maple Music)
- *CATHRYN CRAIG & BRIAN WILLOUGHBY: Real World a
(ナッシュビルの女性 SSW の C. Craig とブリティッシュ・フォーク・グループのストロブスのギター奏者の Brian Willoughby のデュオによる本作は、Brian の美しいブリティッシュ・フォーク・ギターと Cathryn の大人のメルン調の穏やかな唄とが何とも心地よい“Real World”ではなく、“Dreamy World”。ずっと聴いていたい気分。2013 作。Cabritunes)
- *ANNIE KEATING: Water Tower View a
(ひとと味違う凝ったルーツ・ロックは本醸造ルーツ・ロック・ファンを唸らせる。こん

なにセズの良いいかしたルーツ・ロックは滅多にお耳にかかれない。Annieの唄は、セズ抜群の大人のルーツ・ロック・サウンドと共に心と体に美味しい。w. Bo Ramsey, Jason Mercer, Chris Benelli, Chris Tarrow, John Caban, etc. 2010 作。

Annie Keating)

- *COSY SHERIDAN: The Horse King a
(ヴァン女性 SSW の Cosy の本作はひと味違う。様々なサウンドを創り出すアコースティック・ギターの妙技に驚かせられながら、Cosy の唄の世界へとご機嫌に誘われてゆく。音楽性の基本は Good & Old Time なアメリカ・ミュージック。巧みなワザに裏打ちされた音楽は豊かで柔らか。心晴れ晴れする爽快な SSW アルバムだ。w. David Surette, Kent Allyn, Penny Nichols, TR Ritchie. 2011 作。Waterbug)
- *CAROLINE HERRING: Camilla A
(Caroline の音楽性はフォーク/ルーツ・ロック系だが、その中身は自分の物語を含めて、アメリカの物語。Lucinda Williams 級。ゲスト: Jackie Oates, Mary Chapin Carpenter, Aoife O' Donovan, Kathryn Roberts。最後の曲はパート・ハーツの「蛍の光」だが、Caroline は自作のメロディに乗せてうたっている。2012 作。Signature Sound)
- *JANIVA MAGNESS: Stronger For It A
(Janiva の渾身の唄とバンドの南部ロックが、ガツと組み合って、感動の嵐。2012 作。Alligator)
- *FRED JAMES & MARY-ANN BRANDON: We Belong Together a
(ナッシュビルヴァン SSW & キタリストの Fred James とナッシュビルのスワング・クインの Mary-Ann の共演盤。Fred の SSW 的資質と Mary-Ann の南部ブルース&R&B 資質のぶつかり合いは Fred が Mary-Ann の大きな土俵の上で、自身のエレキギターを含め、ガツあるヴァンで精一杯対抗する風ながら、Fred は +α の南部っぽい底力を見せ付けている。Mary-Ann のヴァンは豊潤なヴァンで聴き手を圧倒する。2011 作。ドゥイ SPV)
- *WHEN OCTOBER GOES (1991 作。Philo) A
- *NANCI GRIFFITH: Little Love Affairs (1988 作。MCA) A
- *NANCI GRIFFITH: Flyer (1994 作。Elektra) A
- *REBECCA PRONSKY: Viewfinder A
(ブルックリンの女性 SSW の Rebecca の唄は独特。音楽的には Gillian Welch や Eilen Jewell のような古いルーツ・フォークやルーツ・ロック的な志向性を持ちつつ、トゥーンギンギターの多用に加え、声が豊かで、夢想的で朗々としたヴァンなど、彼女独特な唄世界を創作している。都会のビルの一室で、夢想しているかのような音楽。2011 作。Nine Mile)
- *LIZ MEYER: The Storm A
(カントリー・フォークの女王 Liz の本作は昔からの音楽仲間や中堅音楽家の協力を得て実現した夢に描いてきた同窓会音楽。Bela Fleck, Emmylou Harris, Jerry Douglas, Sam Bush, Stuart Duncan, Rob Ickes, Byron House, Glen Duncan, Ron Block, Kenny Malone 他。2005 作。オランダ Strictly Country)
- *CARRIE RODRIGUEZ: She Ain't Me A
(Chip Taylor とデュオを組んでいた Carrie の二枚目。本作でデュエットする Lucinda Williams 級。2009 作。Continental Song City)

- *KRISTA DETOR:Chocolate Paper Suites a
 (前二作同様、プロデュースは David Weber で、そしてまた前作同様、自身が奏でるピアノの響きが印象的で、時空を超えて、Krista が創作する穏やかで、深く心地よい唄の世界へと運ぶ。Chris Wood, Karine Polwart, Emily Smith, Maura Smiley, Rachel McShane, Malcolm Dalglish, etc. 2010 作。CoraZong)
- *RACHEL HARRINGTON:The Bootlegge's Daughter A
 (2008 年作の“City Of Refuge”が好評の Rachel の 2007 年作のデビュー作。Rachel の唄を包む空気は百年前のアメリカ西部、或いはアラバマだったり、今日のルーツ・ロック風だったり、また今日の田舎の SSW 風だったりする。2007 作。Skinnydennis)
- *LINDA HARGROVE:One Woman's Life A
 (カントリー・フォーク系のヴァンセンSSW の Linda の本作はヴォーカルも音作りもヴァンセンの風格漂う Great な SSW アルバム。名うての楽士達のバックアップが見事。Linda の揺るぎ無い唄に相応しい演奏で支える楽士は Sam Bush, Kenny Malone, Jeff Davis, Dennis Burnside, Pam Rose, Hoot Hester, etc. 2005 作。Panacea Productions)
- *KATE McDONNELL:Where The Mangoes Are B
 (Kate の本作が 4 枚目。Kate ならではの壊れそうで逞しい唄たちだ。Kate は今を唄う吟遊詩人。2005 作。Appleseed)
- *SUZANNA SPRING:She's Got Your Heart A
 (本作は敏腕プレイヤーによる奥深くもピリッとカッコいいルーツ・ロックの見事さ中で女性ならではの哀愁や感傷や夢想等の感情が実にいい感じで美味な唄として結実している。カッコいい音の波に乗ってる、って感じだ。2003 作。Suzanna Spring)
- *CLARE MULDAUR:Bentley Circle ¥700
 (Geoff&Maria の娘 Clare の 2 枚目。Clare の夢見るような素朴な唄の数々とこれまた夢見るような素朴なギター、チャング、マティカ等の伴奏の音色の心地よさは憎いほどの素敵さ。2003 作。Clare Muldaur)
- *WENDY BECKERMAN:Mango Moon A
 (Jack Hardy おかかえのミュージシャンがバックを固めた Wendy の 3 枚目の 96 年作。Wendy の持ち味がシンプルにリカルに表出。唄の自由さと彩りのある素敵な女性 SSW アルバム。Brambus)
- *FLORAMAY HOLLIDAY:Floramay Holliday B
 (南キャロライナの女性 SSW。Kelly Willis と比較されることの多い SSW だが、Floramay の方がロック的で南部志向。エレキを内にキープした本格的ヴォーカルをテキサスのヴァンセン達が本醸造ロックでサポート。w. Lloyd Maines, John Inmon, Gene Elders, etc. 98 作。Roseneath Music)
- *ROSALIE SORRELS:No Closing Chord a
 (Malvina Reynolds ソング集。w. Bonnie Raitt, Laurie Lewis, Nina Gerber, Barbara Higbie, etc. 2000 作。Red House)
- *PEGGY SEEGER:Love Will... Linger On... a
 (副題“Romantic Love Songs”。子守唄のように夢心地な唄達。w. Colum&Nei MacColl, Irene Scott, etc. 2000 作。Appleseed)
- *KIM RICHEY:Bitter Sweet(97 作。Mercury) A
- *MARIA MULDAUR:Meet Me At Midnite(1994 作。Black Top) A

[DVD/CANADA] PAL 2

※PAL 専用 DVDプレーヤー/パソコンで再生可能

*NEIL YOUNG:Heart Of Gold

D

(2枚組。ディスク1はドキュメンタリー+ライヴ1曲で、ディスク2は2005年ナッシュビルでのライヴ。全19曲。w. Emmylou Harris, Ben Keith, Spooner Oldham, Karl Himmel, Chad Cromwell, etc. ディスク2のライヴは一曲一曲が聴き所、見所。2005年。オランダ。Shangri-la)

[DVD/CANADA] NTSC all regions

※国内製 DVDプレーヤーで再生可能

*LEONARD COHEN:Under Review 1978 - 2006

B

(カナダを代表するSSWのL. Cohenの多数の希少ライヴ映像を含む貴重映像と写真を挟みながら John Simon, John Lissauer, David Cohen 等 L. Cohenのプロデューサーやジャーナリストがアルバムを追いながら彼の音楽を語るドキュメンタリー-DVD。64分。2008作。Sexy International)

*RONNIE HAWKINS:Still Alive And Kickin'

B

(The Bandの前身The Hawksのリーダーでカナダのロック界のホースのRonnie HawkinsのHawks時代の貴重ライヴ映像や今日のバンドのライヴを挟みながら、癌の手術そして快復等 R. Hawkinsの普段着の姿と音楽人生が記録されたDVD。Robbie Robertson, Kris Kristofferson, クリントン大統領が R. Hawkins を語る。約90分。2004作。CTV)

[CD/CANADA]

*KEN WHITELEY:Freedom Blues

B

(Ken Whiteleyが2016年にこんな南部フィーリングな凄いアルバムを作っていたなんて知らなかった。スライド・ギターを自在に操りうたうKenは、自由を求めて黒人霊歌をうたうブルース・シンガー。それはまるで1970年代の例えば、David Essig や Willie P. BennettのようなカナダのSSWが年齢を重ねて、独自のブルースを作り上げたかのようなカナダ人独特な感性に裏打ちされた生真面目で、錬磨された霊歌でブルース。Amoy & Ciceal Levy 姉妹や Kim & Reggie Harris のゴスペル・シンガー達が、Ken 演唱と一つとなってゴスペルな声を振り絞っている。ラストはゴスペル仕立ての"I Shall Be Released"。2016作。Boleals)

*ERIN COSTELO:Down Below, The Status Quo

A

(カナダで12もの賞にノミネートされたという女性SSWのErinの本作は、Erinの地元カナダの東端のノヴァスコシアで録音されたものだが、主人公Erinのソウルフルなヴォーカルと言い、女性バックグラウンド・ヴォーカルを伴ったスタイルと言い、米国南部録音と聞き違える豊穡な南部サウンドと言い、その豊かな米国南部志向の音楽に驚かされる。Erinのヴォーカルは何か余裕綽々なムードなのが、また凄い。2016年/2018作。Compass)

*FRED EAGLESMITH:Standard

A

(愛すべきカナダのヴェテランSSWのFred Eaglesmithの愛すべき新作。バンド編成だが、Fredの心はギターを弾き語りし

ていた時代に初心回帰するように、一心に声をふり絞る。それらの唄は、Roger McGuinn や Willie P. Bennett や Chip Taylor などの唄とイメージが重なる。デジタル音とは無縁な粗いルーツロック・サウンドが、彼の不器用に古いスタイルのままの泥臭くルーズなヴォーカルにバッチリ合っていて、ひとつひとつの唄が心にぐさり。「泥臭くルーズ」だが、唄に一匹老狼 SSW としての魂が宿っている。2016 録音の 2017 作。Fred Eaglesmith)

- *BLUE RODEO: 1000 Arms B
(1984 年結成のカナダのヴェテラン・カントリー・ロック・バンドの Blue Rodeo の本作は、西海岸カントリー・ロックの王道を突き進む信じられないほど爽快なカントリー・ロック。現在のメンバーは Greg Keelor {ヴォーカル、ギター}、Jim Cuddy {ヴォーカル、ギター}、Bazil {ベース} のオリジナル・メンバーに Glenn Milchem {ドラムス}、Michael Boguski {キーボード}、Colin Cripps {ギター、ヴォーカル} の六太郎。Poco と Byrds の美味しいところ清々しく受け継いでいて、感涙。彼ら、音楽で青春してますね。2016 作。TeleSoul)
- *BLACKIE&THE RODEO KING: Let's Frolic B
(Stephen Fearing, Colin Linden, Tom Wilson から成る "Blackie" の 2006 作。True North)
- *RICHARD NEVILLE: Old Souls a
(Richard Neville はカナダ東部のブラドル半島の SSW。ブラドル半島の人々や文化に触発された自作の唄の数々は、ほっこりしていて、古くからの友の唄を聴くように体にしみわたる。例えば、田舎暮らしをしていて、穏やかになった Gordon Lightfoot のようなメロディの唄。自身のギターの弾き語り+軽やかなカントリー・ロック風サウンドは、彼の温厚な唄とともに何とも心地よい。SingSong)
- *BONNIE DOBSON: Take Me For A Walk In The Morning Dew a
(Bonnie Dobson の 2014 作。録音は英国のロンドン。Her Boys と名付けたグループ {B. J. Cole もメンバー} を伴って制作された本作は、衰えを知らぬ歌声と決して懐古趣味的ではないソリッドなアコースティック・フォーク〜フォーク・ロックに現在進行形の今の Bonnie の音楽が瑞々しく表出されている。12 曲目の "Sandy Boys" などは Fairport みたいな気力充実のフォーク・ロック。2014 作。Hornbeam)
- *IAN TAMBLYN: Side By Each B
(海の生き物に心を寄せ、旅の思い出を回想する Ian の心の唄は、本作において、一段と穏やか。ギターの美しい響きなど、ふと "High Winds White Sky" の頃の Bruce Cockburn を思い出した。w. Rebecca Campbell {彼女のほわっとしたハーモニ・ヴォーカルは Ian の音楽に欠かせなくなっている}、Fred Guignion, Pat Maher。2013 作。North Track)
- *IAN TAMBLYN: Gyre B
(「四つの海岸プロジェクト」は一休み。地球を旅する Ian のその感動の瞬間の心情が一枚の印象的な風景写真のように詩的に詠まれ、うたわれている。本作は W. G. Tamblin {1923-2009}、Willie P. Bennett {1951-2008}、M/S Explorer {1968-2007} の霊に捧げられている。評価する隙を与えない名作。2009 作。North Track)

- *IAN TAMBLYN:Superior – Spirit And Light B
 (本作は四つの海岸プロジェクトの1作目で、I. Tamblynが育ったところであり、音楽の旅のスタート地のスピリット湖と北西オタワに焦点を当てたもの。本作は青春時代を過ごした湖の生活に想いを馳せ、心遊ばせた唄たちが収められている。煌くギター演奏ほか生まれた音楽は細心の音作りが成され、Ianのまさに“Spirit and Light”に象徴される魂が乗り移った唄はかつてなくと言っても過言ではない程彼らしいヒューマンイーと詩情を高めている。2007作。North Track)
- *IAN TAMBLYN:Angel’s Share B
 (Ian Tamblynらしい素晴らしいアルバム。旅するSSWのIanの目に映る世界はどれも霊的なほど美しく神秘的に輝いている。感動的な風景や旅の出来事の詩的描写の見事さは本作においてもなお絶品。w. Rodney Brown, Rebecca Campbell, Ken Kanwisher, Fred Guignon, etc. 2004作。North Track)
- *JENN GRANT:The Beautiful Wild A
 (カナダの女性SSW, Jennの4枚目。米国の女性SSWのMeg Christianのよくなゆったりと漂うような唄なのだが、Jennは深いポップ・ロックサウンド効果もあって、奥が深い。またイントロアクションから始まり、Neil Youngの「孤独の旅路」っぽい2曲目から夢の旅路へと誘って、ラストの12曲目、子ども達の唄で終わったかと思っていると、しばらくしてJennのピアノの弾き語りという展開は長い夢の唄の旅をした気分させる。プロデュースはDaniel Ledwell。2013作。Blue Rose)
- *AMELIA CURRAN:Spectators A
 (Ameliaは絶望や寂しさの中から光を求めるような唄が多く、唄から漂う雰囲気はNatalie Merchantを想起させる。闇の中で「キラ」の素敵な唄たちだ。どこかで70年代SSWのスピリットを引きずっている感じだ。ゲスト:Oh Susanna。2013作。Blue Rose)
- *OLD MAN LUEDECKE:Tender Is The Night A
 (ここ数年で最高にお気に入りのカナダのSSW。この自ら「老人」と名づけたバンドの弾きSSWのおっさんが住む世界は、唄の世界も音楽的にも田舎っぽい、同時に夢のような世界。その夢のような世界がもう最高。なぜかTim O’Brienがプロデュースをやっていて、様々な楽器と唄で、まるで長年の相棒のようにわきあいあいと共演している。本当に魅力的なSSWだ。2012作。True North)
- *DAVID FRANCEY:Live From Folk Alley A
 (2005年11月、Kent State Folk Festivalでのライブ。伴奏はShane Simpsonのギターのみ。Davidの唄の世界は流れる風景や絵本を眺めているように映像的だ。最後から2曲目の“Morning Train”は、キリスト、ブッダ、アラーと駅や列車内で出会う唄だ。最後に出会うのは悪魔。発想が面白く、実に面白い唄だ。全曲訳詩が欲しいところ。素晴らしい唄と一緒にフェスの空気も味わって欲しい。2012作。Greentrax)
- *MURRAY McLAUCHLAN:Swinging On A Star(1988作。カナダEMI)B
- *MURRAY McLAUCHLAN:The Songbook... New Arrivals a
 (M. McLauchlanの本作は“Eddie”というミュージカルの為にMurrayが作詞作曲した14曲入。Murrayの唄は古いジャズやポピュラーソングを唄うようにソフドでスタイルブックで粋なサウンドののってうたうMurrayの唄は気

- 持ちいい。2006 作。EMI)
- *RAY BONNEVILLE:Rough Luck A
(南部ロック志向 SSW の R. Bonneville の 2000 年の作。Produced by Tim Williams & Ray Bonneville。Stonefly)
- *WAYNE ROSTAD:Storyteller (1991 作。Stag Creek) C
- *DAVID WIFFEN:South Of Somewhere (1999 作。True North) C
- *MAE MOORE:Folklore A
(カダの自然や大地の自然現象や風景を入口に夢物語の世界へと誘うカダ人のセクが微細に発揮された見事な女性 SSW アルバムだ。Mae の唄はどの唄も自然や大地を描いた不思議な絵のよう。すぐにイメージするのはやはり Joni Mitchell。Mae の音楽性は丁度 Joni Mitchell の初期からジャズっぽい“Court And Spark”までの幅でキラと光るサウンドと唄とで魅了する。カダの SSW の感性が光る名盤だ。2010 作。Poetical)
- *DEVON SPROULE:Don't Hurry For Heaven! A
(カダ生まれの米国ヴァージニア州の 100 人のコミュニティで育った Devon の本作は 60 年代～70 年代ロックの感触の諧謔的音楽を含め子悪魔的魅力全開。2010 作。Black Hen Music)
- *DEVON SPROULE:Upstate Songs A
(2003 年作。アコースティック演奏による軽やかにひるがえるヴァーガルの少女っぽさと新鮮さそして夢見心地さはすこぶる魅力。胸キュン。2003 作。Tin Angel)
- *JOHN WORT HANNAM:Queen's Hotel A
(本作が四枚目というカダの SSW の J. W. Hannam の第一印象は Rodney Brown。ヴァーガルの質も似ているが、Rodney のようにマイペースで、温厚で、どこか爽やかな風が吹いているような感じも似ている。違うのはこちらの方がやや渋めというか、一歩引いた大人の哀感も感じられることだろうか。さりげなさがとても快い良質の SSW アルバムだ。w. Steve Dawson, John Reischman, Jenny Whiteley, etc. 2009 作。Black Hen Music)
- *COLIN LINDEN:Sad&Beautiful World 1975-1999 A
(南部ロッカー C. Linden の初期音源中心の 18 曲入編集 CD。2004 作。True North)
- *GREAT LAKE SWIMMERS:Lost Channels a
(カントリー・ロック・ファン大推薦。かれらの音楽は 70 年代ロックに夢のヴァールを掛けた感じで、70 年代ロック・ファンの弱い部分をくすぐる夢の音世界を創作し切っている。天下一品。2009 作。イギリスNetwork)
- *FRED EAGLESMITH:Indiana Road C
(ラップ包装なし。w. Willie P. Bennett, David Essig, Ralph Schipper 他。1987 作。BASH Music)
- *FRED EAGLESMITH:Dusty A
(ラップ包装なし。2004 作。Major Label)
- *VEDA HILLE:This Riot Life A
(通算 12 枚目になる個性的 SSW の Veda の本作は不思議音楽。ピアノで音遊びしながら生まれたような彼女の唄は独り夢の中を旅する感覚の音楽。2008 作。Ape House)

- *VALDY & GARY FJELLGARD: Still In The Running A
 (副題“Contenders Two”。齢を重ねたじいさん SSW お二人の温かな唄達。心あったか保証。2007 作。Stony Plain)
- *TIM WILLIAMS: Songster, Musicianer, Music Physicianer A
 (ホトネック・ギター等ブルース・ギターを弾き年季の入ったブルースやブルース風自作曲を悠々とうたう。長年活動を共にしているバンドが数曲で共演してはいるが、バンドのヴォーカル&ギターとしての印象よりブルース・タイプの SSW 的なコのある味わい。一匹狼の風格。2007 作。Gayuse Music)
- *EILEEN McGANN: Beyond The Storm (Dragonwing) A
- *JANE SIBERRY: Shushan The Palace A
 (カナダの女性 SSW の Jane の本作は副題“Hymns of Earth”のクリスマス時期にあわせて制作された主に数世紀前のヘンデルやバッハ作曲曲を含む聖歌集。Jane ならではの優美な聖歌の世界。2003 作。Sheeba)
- *ENNIS SISTERS: Christmas B
 (ニューファンドランドの美人3姉妹による美しいクリスマス・アルバム。トラッド色も無いことも無いが、彼女等本来のフォーク〜カントリーなサウンドの姉妹の美声が活かされたフレッシュなクリスマス・アルバム。新年を祝うダンサブルな楽しい唄で幕。これはケープ・ブレント・トラッド色濃厚なトラッド・ロック。2002 作。Warner)
- *TIM HARRISON: Tim Harrison ¥1000
 (名作 79 年作“Train Goin’ East”と 85 年作“In the Barroom Light”からの 10 曲を新たに録音したもの。99 作。Second Avenue Songs)
- *KENNY BUTTERILL: Just A Songwriter B
 (米国在住カナダ人 SSW、Kenny の本作はバック&ゲスト {Willie P. Bennett, Ray Bonneville, Norton Buffalo, Joe Weed, Larry Hosford, Mary McCaslin, etc.} もばっちり固めた J. J. Cale 風似込み味 SSW アルバム。2003 作。No Bull Songs)
- *RAY MATERICK: Rockin’ The El Mocambo 82 a
 (CD-R。“El Macambo Tavern”での 82 年の重厚ライブ。ギター、ベース、ドラムス、チェロ、サクソによるバックはトーストス重戦車のパワー。Ray のヴォーカルは火の玉。スローもアップテンポも手に汗握る入魂のロック。2002 作。KingKong)
- *RAY MATERICK: Ashes And Dust a
 (CD-R。最も音作りばっちりの僕等が知る 70 年代の Ray 風。ベース奏者がに懐かしい Tim Drummond。Ray のしゃがれ声の唄とがっちり噛み合うタイトな 70 年代風ロック。すべてが理想の SSW アルバム。Steve Smith のスティール・ギターも Michael Fanferra のオルガンも Lisa Winn & Bob Lamothe のバック・ヴォーカルもいい味わいだ。抜群！2001 作。King Kong)
- *SCHULD&STAMER: You Got The Bread... We Got The Jam a
 (Stamer が全面的にヴォーカル。もうロックの J. B. Lenoir 作“Voodoo Music”から Stamer の泥つとしたブルース・マジックの世界へ引きづり込まれる。ゲストの Long John Baldry もヴォーカルで 4 曲飛び入り。生きたブルース。絶句。98 作。Blue Streak)
- *SHANNON LYON: Tales Of A Yellow Heart A
 (2000 年作“Summer Blonde”が人気だった S. Lyon の 97 年作。まるで Neil Young with Crazy Horse。粗削りな 70 年代風ロック。97 作。

- Swallow)
- *KATHY PHIPPARD:Outside Lookin' In B
(ニューファンドランドの個性派女性SSWのデビュー作。ピアノの弾き語りを中心に
した感情の起伏の大きな唄達は魅力。極めてかたがのSSW的個性。音
作りも七変化。98作。Candle View)
- *TAMMY FASSAERT:Corner Of My Eye A
(ヴァンクーバー島出身のさわやかな女性SSWアルバム。ブルグラスとフォーク
がアコースティックに気持ちよくブレンド。彼女の濁りのなさは貴重。
2000作。Tam Can)
- *THE SWALLOWS:Turning Blue A
(Blue RodeoのGlenn MilchemがThe Swallowsという名で作ったデ
ビュー・ソロ。70年代ブリティッシュ・フォーク〜ロック的香り漂う不思議ロック。ジヤケッ
トもサケ調。2000作。Magnetic Angel)
- *TONY KOSINEC:Almost Pretty A
(T. Kosinecの79作の4枚目。2000作。Vivid)
- *SNEEZY WATERS:A Letter Home B
(テキサス・ミュージックやブルースをベースにした雑食性に富むルーツ・ロック。Sneezy
らしい個性が盛り込まれている。ヴァンクーバーの風格。97作。Watershed)
- *GORDON LIGHTFOOT:A Painter Passing Through a
(G. Lightfootの本作は、清々しくもある種枯淡の境地。w. Daniel
Lanois, Willie P. Bennett, Barry Keane, Terry Clements, etc. 98
作。Reprise)
- *FRANCESCA:Au-Dela Des Couleurs B
(フランス語、スペイン語、イタリア語、英語でつぶやくように、また情熱的に唄
う地中海ムードの女性SSWアルバム。かなりの本格派だ。99作。BMG)